

ひびき

教育目標：「なかよく かしこく たくましく」

～ 夢と自信と思いやり ～

多治見市立共栄小学校 R2. 7. 31

【“させる指導”より“したくなる指導”を…】 校長 宮地敏彦

全国的にコロナ感染拡大防止の自粛ムードが緩んだのちに、7月に入り再び全国的に感染が拡大傾向にあります。保護者の皆様もご心配のことと思います。学校では、少なくとも今年度末の3月までは新しい生活習慣の定着に向けての取組を継続していきます。ソーシャルディスタンスの確保、マスク着用、手洗い、消毒、検温等、教職員も日々丸となって頑張っています。授業においても、グループ活動や学習内容などが制限される中、子どもたちの興味や意欲を引き出す工夫をしています。

学習面でも生活面でも、「なぜそれをするのか?」「それをするとなんないことがあるのか?」等を考えさせ行動させることが大切です。つまり自ら

考える習慣を付け「主体的に行動できる子を育てる」ということです。その土台に立って子どもたちに関われば、学習面でも、生活面でも、またコロナ対策においても“考える癖”がつくようになります。

逆に、親や教師が上から目線で、指示するばかりで子どもの姿を変えようとすると、「言われればやるけど自分で考えて行動しない」子を育てることになります。さらに、指示の多さに加え、その指示の口調が強迫である場合は、「しかたなくやるけど心を閉じる」子をつくってしまいます。あるいは、大人不信・教師不信になる場合もあります。そのような子達は、主体的に親や教師の言葉を受け入れていないので、別の人の助言を受け入れなかったり、言われることが正しいと思っても素直に聞けなかったりします。

姿の変容は、心の変容(成長)の結果としてあらわれるものです。心の成長には法則があると思います。受け入れられて、まかされて、認められて、ほめられれば、指示されなくても人の喜ぶことや自分の成長につながることをしたいと思い、そのように行動しようとしています。なぜなら人は誰も心の奥底に笑顔への飢え渇きがあるからです。今年度、チーム共栄で目指しているのは、「夢と自信と思いやりをもって生き抜く子の育成」です。自分の良さを、自信をもっていきいきと姿で表せる子を育てていきましょう。

【心のゆとりの大切さ ～ソロモン諸島体験記④～】

多くの途上国に共通してみられる生活習慣の一つに「時間にルーズ」ということがあります。特に暑い地域の人たちは、その暑さから身を守るためもあってか、せわしなく動くことはありません。

年に1回首都で開催する中高等学校陸上競技大会で、大きな課題の一つとなっていたのが、出場選手が競技前の集合時刻に遅れることでした。事前の運営会議で、参加校のスポーツ担当教師に念を押してコール時刻を厳守することを依頼しましたがなかなか徹底されません。普通、公式な大会では、コール時刻に遅れたら失格となるのですが、それをする

と失格となる子が多すぎて大会が成立しなくなってしまうので、結局待ちながら大会を進行します。その結果、空が夕焼けに染まる頃になっても競技は終わらず、見物していた大人達が近くを走っているバスやタクシーに声をかけに走ります。日が沈み、ストップウォッチが見えなくなる頃には、運動場まわりに集められた車のヘッドライトで競技を続けます。運動場を囲んで集まっているのは、各校の選手以外に応援の生徒や先生達も皆いるのですごい人数です。(私の勤務校の生徒だけで500人いました。)船で来ている学校はどうやって帰るのか? 大会の全競技を無事に終えることしか頭になかった私はいまだに彼らがどうやって夜を過ごしたのか疑問です。

スポーツマンシップに則れば、『ルールはルールだから…。』と時間を守らない選手を失格にして進めていくべきだったのかもしれませんが、今でもそれをしなくてよかったと思っています。なぜなら誰も不満や苦情を言うこともなく、車を提供してくれた運転手達も生徒や先生も、みんな笑顔で帰って行きました。また、ルールより教育的配慮によるその対応が、その後ソロモンで仕事をしていく上での人間関係づくりに大きく影響していたと感じるからです。

ソフトボールの代表チーム(オセアニア地域のオリンピック予選)でさえ、練習時間に30分～1時間遅れて来ます。木陰で涼んで待ち、2～3人来たらストレッチ体操をし、そのまま終わってしまう日もありました。試合に負けて帰国した彼らの、『来年は君のトレーニングメニューをしっかりとやって勝つから大丈夫。』と明るく言う笑顔につられてこちらも笑顔になってしまいます。『ノーワリ。(心配しないで。)]』『ヘミ オラエット ノーモア。(大丈夫!)]』毎日、いろんな場面でこの言葉を耳にしました。



＜平均台を使った3年生の体育授業＞



＜日暮れて出番を待つ女子リレーチーム＞